八重山諸島から見た日本／沖縄（一）

「境界の島々」の歴史

原　知章

原知章さんとの出会いは、ウェップ・サイト。個人的に与那国島について情報を得ようとして、偶然に原研究室ＨＰへ辿りついた。そこには、与那国島に関する様々な情報があり、中でも私は原さんが八重山毎日新聞などに寄稿された記事などを興味深く拝読し、早速メールをお送りした。それがきっかけとなった。また、ちょうどそのころ、私の手元に注文していた沖縄・与那国関係図書数冊が宅配便で届き、その中に偶然、原さんの近著（『民俗文化の現在　沖縄・与那国島の「民俗」のまなざし』（同成社、２０００）も含まれていた。原さんのご研究は、私たちが沖縄について考える上で、とても刺激的に思われご寄稿をお願いした。（明楽）

一　八重山諸島の「重層的な境界性」

九州の南端から台湾まで一二〇〇キロメートルにわたって弧状に連なる琉球列島の最西南端を占める島々が、八重山諸島（以下、「八重山」と記述）である。八重山は、東西一五〇キロメートル、南北七〇キロメートルの海域に散在する大小三一の島々で構成されており、そのうち一二の島々（石垣島、竹富島、西表島、鳩間島、由布島、小浜島、加屋真島、黒島、上地島、下地島、波照間島、与那国島）が有人島である（平成一四年六月末現在）。八重山は、石垣市（人口：四三三〇二人、平成一二年度国勢調査より）、竹富町（人口：三五五一人）、与那国町（人口：一八五二人）の三つの行政区域からなる。このうち石垣市と与那国町は一島一区域であり、竹富町は一〇の有人島からなる。

沖縄島の那覇空港から飛行機に乗ると一時間ほどで、八重山の「玄関口」に当たる石垣島の石垣空港に着く。石垣空港が近づいてくると、飛行機の窓からは、石垣島の周囲に広がるサンゴ礁の海が織り成す美しい色彩のグラデーションを見ることができる。そして空港に到着し

て飛行機のタラップを降りると、「南国」の暖かい空気が身体を包んでくれる。空港の周囲では、サトウキビの葉が風に吹かれてざわざわと揺れている――八重山を初めて訪れる者は、サンゴ礁の海やサトウキビ畑を目にし、暖かな空気に身体を包まれることで「ああ、私は南国に来たんだ」との感慨を抱くに違いない。少なくとも一九九二年に私が初めて八重山を訪れたときはそうであった。以来、一〇年間に、幾度となく八重山に足を運び、また、

八重山の自然・風土や歴史・文化について学んできた。その間に、私が当初抱いていた「美しい南国」という八重山の印象は一変した。

美しいと思われたサンゴ礁の海には、一九七二年の日本復帰以後、土地改良事業や観光開発事業が盛んになるとともに大量の表土や化学肥料が流れ込んできた。今や八重山のサンゴ礁の海は瀕死の状態であるといっても過言ではない。

サトウキビは八重山の伝統的な農作物ではなかった。一七世紀末以後、明治期になるまで八重山ではサトウキビの栽培が琉球王府によって制限されていたのだ。八重山の島々にサトウキビ畑が広がっていくのは第二次大戦後のことに過ぎない。

八重山は、たしかに年間の気温の変化が少なく温暖な地域であるが、台風と干ばつが繰り返し襲ってくる地域でもある。さらに、八重山の人びとは、一九六〇年代にいたるまで、風土病としてのマラリアに苦しめられてきた。

歴史・文化の面でいえば、八重山は、その地域的な特性を「重層的な境界性」と表現することができる地域で

ある。

「重層的な境界性」とはどういうことか。

日本のなかには、歴史・文化の面において「日本であって、日本ではない」とその地域的特性を表現することができる境界的地域が存在する。沖縄県（以下、「沖縄」と記述）は、そうした「日本であって、日本ではない」境界的地域のひとつである。

しかし、その沖縄はまた、「沖縄」とひとくくりにすることができない歴史・文化的多様性を内に抱え込んでいる。東西一〇〇〇キロメートル、南北四〇〇キロメートルの海域に散在する四九の有人島によって構成される沖縄では、島ごとに、さらには島内の「シマ」（いわゆる自然村のことであり、現在の行政区画における「字」にほぼ相当する）ごとに、独自の歴史・文化が形成・展開されてきたのである。

こうした歴史・文化的多様性を抱え込んでいる沖縄のなかには、「沖縄であって、沖縄ではない」とその地域的特性を表現することができる境界的地域が存在する。八重山は、そうした「沖縄であって、沖縄ではない」境界的地域のひとつである。ところが、ここでは詳述することができないが、その八重山の島々のなかにも、実は「八重山であって、八重山ではない」と地域的特性を表現することができる境界的地域が存在するのである。

このように八重山は、「日本であって、日本ではない」沖縄のなかの「沖縄であって、沖縄ではない」境界的地域であり、さらにその内部に「八重山であって、八重山ではない」地域を含む「重層的な境界性」によって特徴づけられる地域であるのだ。

この小論では、八重山の歴史を素描することを通じて、八重山を構成する島々の特性としての重層的な境界性の形成過程を明らかにしていきたい。そして八重山における重層的な境界性の形成過程を明らかにすることを通じて、あらためて「日本」とは何か、「沖縄」とは何かを問うてみたいと思う。

私がこの小論を通じて主張したいことは、以下の二点である。第一に、八重山の重層的な境界性とは、外部地域との関係を通じて人為的・歴史的に形成されてきた特性であって、八重山の自然的・超歴史的な地域的特性に還元することはできないということである。そして第二に、八重山の重層的な境界性が人為的・歴史的に形成さ

れてきたということは、八重山を境界的地域として組み込んだ日本や沖縄もまた、人為的・歴史的に形成されてきた地域的単位であって、自然的・超歴史的な自明の単位ではないということである。

地域間の、人間集団間の、あるいは文化間の境界は、しばしば自然的・超歴史的な自明性をまとっている。しかしこれらの境界が、実際には人為的・歴史的に形成されてきたものであるということは、近年、人文社会科学の様々な分野において「近代性（modernity）」や「国民国家（nation state）」の問い直しが進むなかで、改めて明らかにされてきたことである。これらの研究の成果を大づかみに述べれば、近代性の拡大・深化や国民国家の形成の過程は、地域間に、人間集団間に、あるいは文化間に明確な境界線が引かれ、「自己＝われわれ」と「他者＝彼ら」が排他的な存在として析出されていった過程を伴っており、その過程は自己や他者の管理・支配・統治と相即不離の関係にあった、ということになる。

この小論も、こうした「近代性」や「国民国家」の批判的研究の一環として位置づけることができるものである。ただし、従来の研究では、日本の「内」と「外」の境界のような、いわば「単層的」な自己と他者の境界性が中心的な主題としてとりあげられることが多く、検討の対象となる時代もほぼ近代以後に限定されることが多かったように思われる。これに対してこの小論では、すでに述べたように、「重層的」な自己と他者の境界性に注目し、先史時代から現代にいたるまでの長期の歴史を射程に入れて、八重山における重層的な境界性の形成過程を明らかにしていく。具体的には、以下のように議論を進める。

まず、八重山の歴史の時代区分を設定し、その上で、八重山の歴史を総括的に述べる。つぎに、先史時代から現代にいたるまでの八重山の歴史を具体的に叙述する。最後に、八重山の歴史の特質を考察することを通じて、八重山における重層的な境界性の形成過程を明らかにし、八重山から見た「日本」と「沖縄」について論じる。

紙幅の都合もあり、この小論では歴史の叙述も考察も、あくまで「素描」にとどまるが、この小論を、今後、より詳細な議論を展開していくための足がかりとしたいと考えている。

二　時代区分の設定

はじめに、歴史の認識・叙述の枠組みとしての時代区分を設定しておかねばならない。図1は、八重山の歴史の時代区分を、沖縄諸島、日本本土、中国の歴史の時代区分と照らし合せたものである。このうち沖縄諸島の歴史の「先史時代」、「古琉球」、「近世琉球」、「近代」（または「近代沖縄」）、「現代」（または「現代沖縄」）という時代区分は、実は、八重山をふくむ沖縄全体の歴史の時代区分として、人口に膾炙（かいしゃ）しているものである。この時代区分の枠組みのもとでは、八重山をふくむ沖縄の歴史は、たとえば以下のように総括される（高良　一九八九、一八～一九頁）。

琉球・沖縄の島々に住みついた人々――この人々が原日本文化ともいうべき文化複合の所有者であったことはすでに通説となっているが――は、旧石器時代・貝塚時代という長い先史時代を経て、一二世紀頃からは本格的な農耕社会に突入し、やがて一五世紀初期に至って琉球・沖縄の各島嶼（とうしょ）を版図とする自立した国家主体、すなわち琉球王国を成立させるまでになった。古琉球におけるこの王国の形成・成立・展開という一連の歴史過程は、一六〇九年の島津侵入事件によって終止符を打たれ、以後は王国体制を保持しつつも本質的には幕藩体制の一環に編成された時代、いいかえると、「幕藩体制の中の異国」として近世琉球の時代を歩むことになる。琉球処分＝沖縄県設置（一八七九年）の結果、王国体制は解体し、沖縄は近代日本の一領域として確定されることになる（近代沖縄）。ところが、沖縄戦（一九四五年）を契機として、戦後沖縄の渦中において、沖縄住民の間から日本社会への復帰を求める運動が広汎に起こり、さまざまな問題を含みつつも日本復帰が実現し（一九七二年）、今日に至っている。

八重山をふくめて沖縄の歴史を叙述する際には、たしかに先の時代区分の枠組みが有用であると思われる。しかし、八重山に焦点を当てて、その歴史を叙述する際には、図1に示した通り、独自の時代区分を設定する必要がある。換言すれば、沖縄全体の歴史の時代区分の枠組みは、沖縄諸島の歴史を叙述する際にはそのまま適用することができるが、八重山の歴史を叙述する際にはその

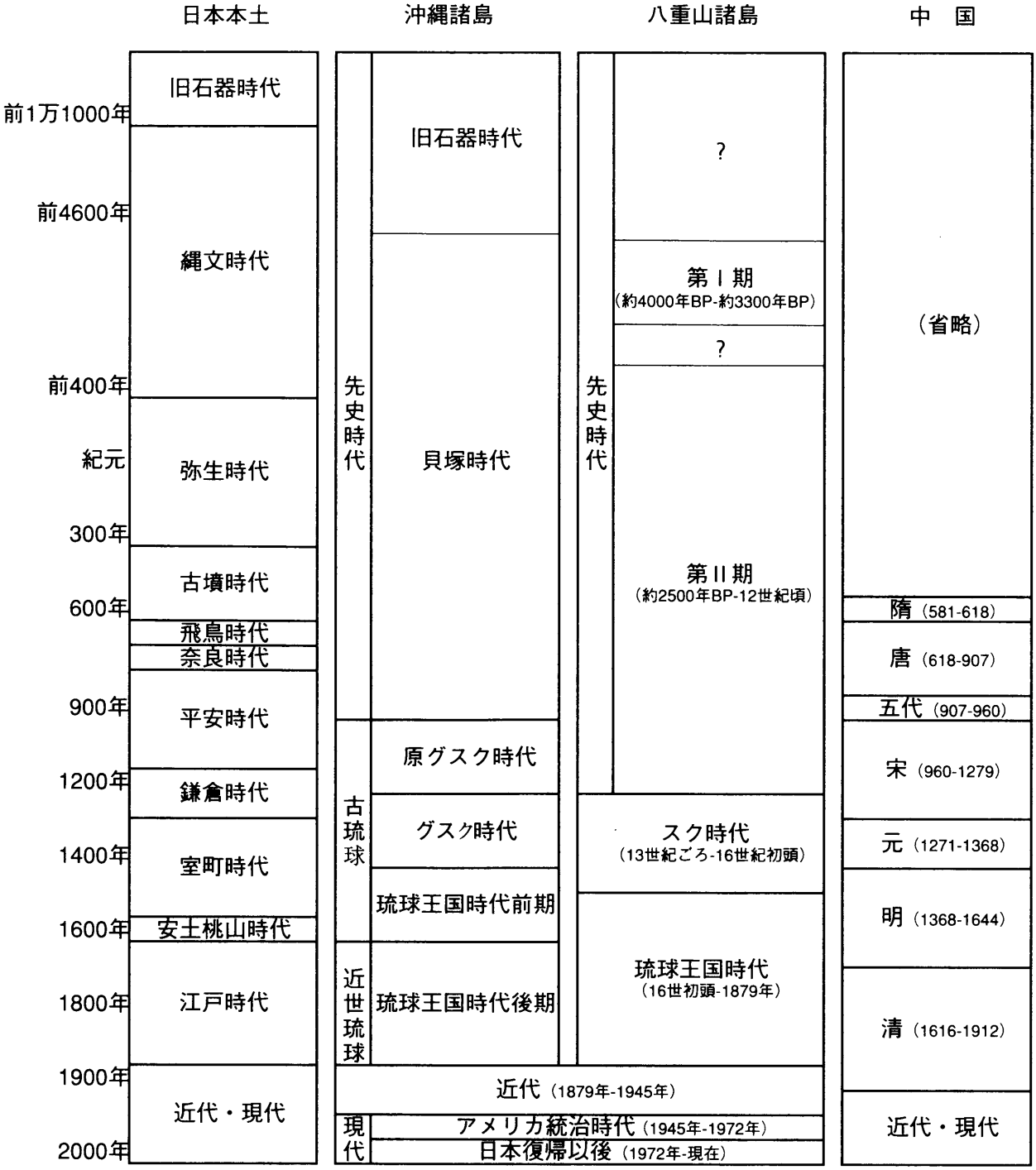

図１　八重山諸島の歴史の時代区分

まま適用できないというのが私の意見である。ただし、私は考古学や歴史学を専門とする者ではなく、ここで提示した八重山の歴史の時代区分の枠組みは、あくまで「門外漢」が便宜的に仮構したものであることをお断りしておかなければならない。私の主要な関心は、「過去」それ自体よりも、八重山という地域の特質、そして「現在」の八重山の歴史上の位置を明らかにすることにある。図1に示した八重山の歴史の時代区分の枠組みは、こうした私の関心を強く反映したものである。

三　八重山の歴史の総括

各々の時代の具体的な歴史の叙述に入る前に、図1の時代区分に基づいて八重山の歴史を総括しておきたい。

先史時代（約四〇〇〇年前～一二世紀ごろまで）　現在のところ約四〇〇〇年前にまでさかのぼることができる八重山の先史時代には、中国南部・台湾、東南アジア、オセアニアなど「南方」の地域の先史文化と類似性・関連性が強く見られる文化が形成・展開された。この頃の八重山では、沖縄諸島や日本本土など「北方」の地域との交流はほとんどなかったと考えられる。

スク時代（一三世紀ごろ～一六世紀初頭まで）　一二世紀以後、沖縄諸島や中国との交流がはじまり、海外交易が活発に行なわれるようになった。また、一三世紀ごろには農耕が普及した。そして、海外との交易や農耕社会への移行を背景として各地に首長が現われ、群雄割拠するようになった。なお、「スク時代」という名称は、石垣島在住の考古学者・大濱永亘氏の主唱によるものである。大濱氏は、この時代の遺跡が立地する場所の一帯の地名が、しばしば「〇〇スク」と名づけられている点に着目して、「スク時代」という名称を提唱した（大濱　一九九九）。この「スク」という地名は、同時代の沖縄諸島をはじめとする琉球列島各地で多数構築された「グスク（城塞）」に通じる語であると考えられている。

琉球王国時代（一六世紀初頭～一八七九年の沖縄県設置まで）　沖縄諸島に成立していた琉球王国が版図の拡大を進めた結果、一六世紀初頭に八重山諸島は琉球王国の版図に組み込まれ、琉球王府の統治下におかれた。一六〇九年の島津侵入事件以後は、琉球王府による八重山の統治が再編・強化され、いわゆる「人頭税」が制度化された。人頭税に加えて、中間役人層による搾取が横行し、自然災

害や疫病などが頻発したこともあって、八重山の農村は疲弊した。

近代（一八七九年～一九四五年の終戦まで）　一八七九年、明治政府により、琉球王国が解体され、沖縄県が設置された。その後、日清両国間で宮古諸島・八重山諸島を清国領土とする内容をふくむ「分島改約案」が合意されたが、正式な調印には至らなかった。かくして八重山は日本国の領土として確定された。沖縄では、琉球王国解体後も、琉球王国時代の諸制度を存続させる「旧慣温存政策」がとられ、八重山の農村では、過酷な税制や役人層による搾取がつづいた。沖縄と日本国内の他地域との制度面の格差が最終的に解消されたのは一九二〇年前後のことであった。一九三一年に柳条湖事件が勃発し、日本国が一五年戦争に突入すると、八重山でもしだいに戦時色が濃くなっていき、太平洋戦争末期には空襲や戦争マラリアにより甚大な被害をこうむった。

現代（一九四五年～現在まで）　太平洋戦争後、沖縄は米軍の統治下におかれた。戦後、沖縄の人口は、戦争引揚者の帰還などにより著しく増加し、食糧不足が深刻化した。こうした状況下で、石垣島や西表島では、沖縄諸島や宮古諸島から多くの人びとが開拓移住者として入植し、定着していった。米軍統治下にあった二七年間に、八重山では、産業構造の変化、高学歴化、市場経済の浸透などの社会変動が進んだ。この社会変動にともなって、とくに離島からの人口流出が進んだ。一九七二年の日本復帰以後は、日本国政府主導のもと社会資本や産業基盤の整備が進み、一九八〇年代以後は観光地化が進んだ。近年では、公共事業や観光開発事業による環境破壊が問題化している。また、今日にいたるまで離島からの人口流出には歯止めがかかっていない。ただし、近年では、八重山以外の地域、とくに日本本土から八重山に移り住む人びとの数がしだいに増えてきている点が注目される。

次回は、以上に総括的に述べた八重山の歴史を具体的に叙述したい。

参考文献

・大濱永亘『八重山の考古学』先島文化研究所、一九九九年。
・高良倉吉『琉球王国史の課題』ひるぎ社、一九八九年。

（はら・ともあき／大分県立芸術文化短期大学）